

遺跡踏査私記 (II)

原 田 耕 治

昨年度、同題名で1.逆川遺跡(仮称)2.平塚山下遺跡(仮称)を紹介した。その後、掛川市遺跡地図が出版され、逆川遺跡は神子地遺跡、天神遺跡、中畑遺跡、高畑遺跡の四遺跡に大別され、平塚山下遺跡は北袋遺跡と明記されている。

前記の遺跡の時期は私の見解と同一であったが、後記の北袋遺跡の時期は私の見解と若干の差異があった。掛川市遺跡地図では、古墳時代中期から後期と記されていたが、私は古墳時代中期から平安期と記述した。本遺跡からは山茶わん等が多量に出土していることから私の見解の方が正しいと考えている。

今回は、和田岡原の三遺跡と原谷西山遺跡(仮称)、原新田遺跡(城北小西側)、大竹横穴群の六遺跡を紹介したい。

前回と同様、採取した土器のみの為、概略しか記述できないが、御了承いただきたい。

I、和田岡原の遺跡

和田岡原は全地域が遺跡であるという。事実、どの地域を踏査しても縄文式、弥生式、土師器、須恵器のいずれかの土器片が多量に採取できる。これらの土器分布を概略的に記すと、県道掛川・山梨線の南側は弥生式土器、土師器が主流であり、北側は縄文式土器が多量に散布している。

古墳は四基の前方後円墳(金塚・ひさご塚・行人塚・大塚)が現存し、他に二基の前方後円墳(藤六三号墳・四号墳)が消滅した。

和田岡原の発掘調査は春林院古墳(S36)、金鑄原遺跡(S56)、行人塚遺跡(S56)、中原遺跡(S57)がなされている。又、大塚、ひさご塚、金塚は測量調査が実施されている。

行人塚古墳は最近まで円墳と考えられていたが、女高遺跡の調査により大塚と同方向、全長42mの前方後円墳と判明した。

⑦吉岡原遺跡

(位置と環境)

県道掛川・山梨線を吉岡原に登り切った南側平坦部をいう。中原遺跡・吉岡大塚古墳の真南に位置している。

中原遺跡は縄文中期初頭五領ヶ台式土器から中期中葉勝坂Ⅱ式に比定される遺跡であり、集石遺構一基とさらに新しい時期の土墳一基を検出した。

吉岡大塚古墳は墳丘全長55m、後円部径41.3m、前方部巾27.5mの県下でも珍しい帆立貝型前方後円墳である。帆立貝型古墳については、「前方後円墳の前方部を極度に短くしたか、あるいは前方後円墳の後円部の一部だけを独立した墳丘に造った形」とみて、それは政治的「規制を受けた古墳」として、変形された前方後円墳と理解する見解が全体的に有力である。時期は中期前半後から5C前半終末前後とされている。立地上等から考察すれば、現存する前方後円墳の中では、最も新しい時期に位置づけられる。

(遺跡の概要)

最近、茶の改植が急速に進んでおり、本遺内でも二地域で行われた。その一地域は遺跡内中央部であり、他の一地域は遺跡内西側、県道沿いであった。この西側県道沿いの地域は掛川市遺跡地図に記載されていない。

土器片より遺跡の概要を把握すると、中央部地域は弥生後期前葉から古式土師器の時期であり、西側、県道沿いの地域は縄文中期、弥生後期の時期である。又、遺跡内全域から弥生後期から古式土師器の土器片が多量に出土している為、弥生後期から古墳時代初期の遺構が広範囲に渡って存在していると考えられる。

(遺物について)

①遺跡中央部

高杯(図1) 無文であり、杯の傾斜は急、脚部に丸い透しが

ある。透しがあることから五領期の古式土師器である。

台付鉢(図2) 脚部との接合部に「刷毛目模様」が入っている。弥生終末期か、古式土師器の五領期である。

甕(図3) 口縁部が「く」の字形に屈折しており、頸部に刷毛目模様が入る。口縁部にはヘラで刻みの入った物と無文の物とがある。時期は弥生後期末である。

壺(図4) 頸部には縦に刷毛目模様が入り、胴部に至る所へラ状器具を強く押捺した文様が三列に並んでいる。頸部から胴部へ至る所にも刷毛目模様が薄く残存している。時期は弥生後期前葉である。

② 遺跡西側、県道沿い。

壺(拓本5) 口縁部には縦に沈文と一本の太い浮文とがある。内側には斜めに太い沈文があり、折り返しがある。胴部にも横に平行に沈文が走る。縄文中期阿高式に比定する土器片であろう。

壺(拓本6) 口縁部には二本の深い沈文の連弧文が入りそうである。又、口縁部最上段には一本の沈文が入り、浮文の中にヘラ状刺突文が入る。時期は縄文中期である。

(遺跡の性格)

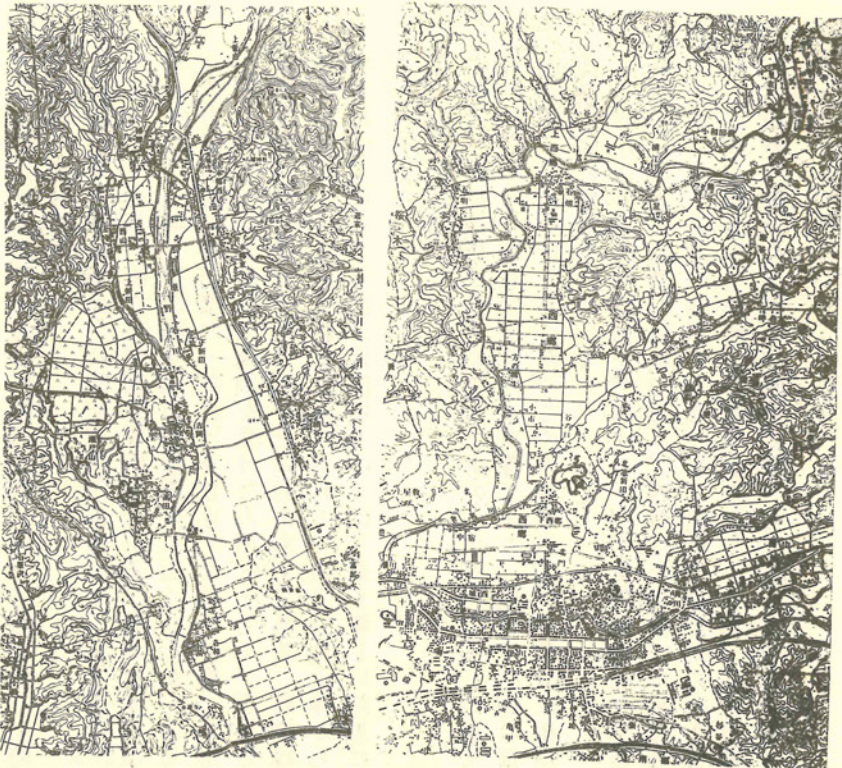
遺跡中央部は弥生後期菊川式土器の時期から古式土師器五領期の時期であり、遺跡西側・県道沿い地域は縄文中期と弥生後期末の時期である。

中央部は弥生後期の包含層の上部に古式土師器五領期の包含層があり、時期は連続的に続いている。西側、県道沿いは縄文中期の包含層の上部に弥生後期末の包含層がある。この弥生後期の包含層が本遺跡全域に渡っているものと思う。

① 高田遺跡

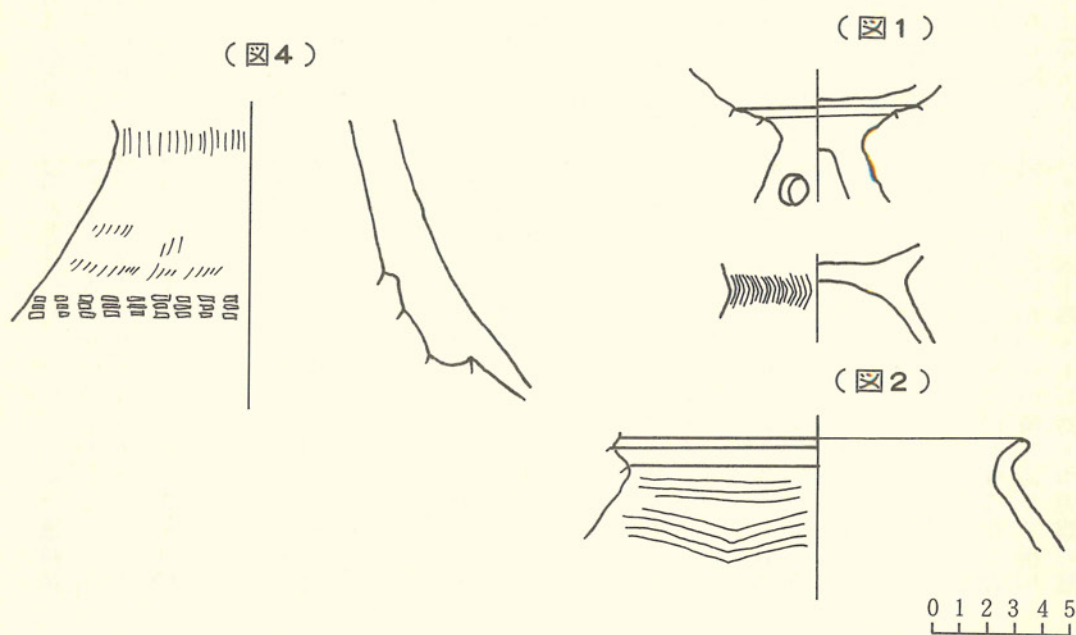
(位置と環境)

行人塚古墳、女高遺跡の西側、高田製茶工場裏から西側に広がっている地域である。女高遺跡は昭和五十七年に発掘調査さ

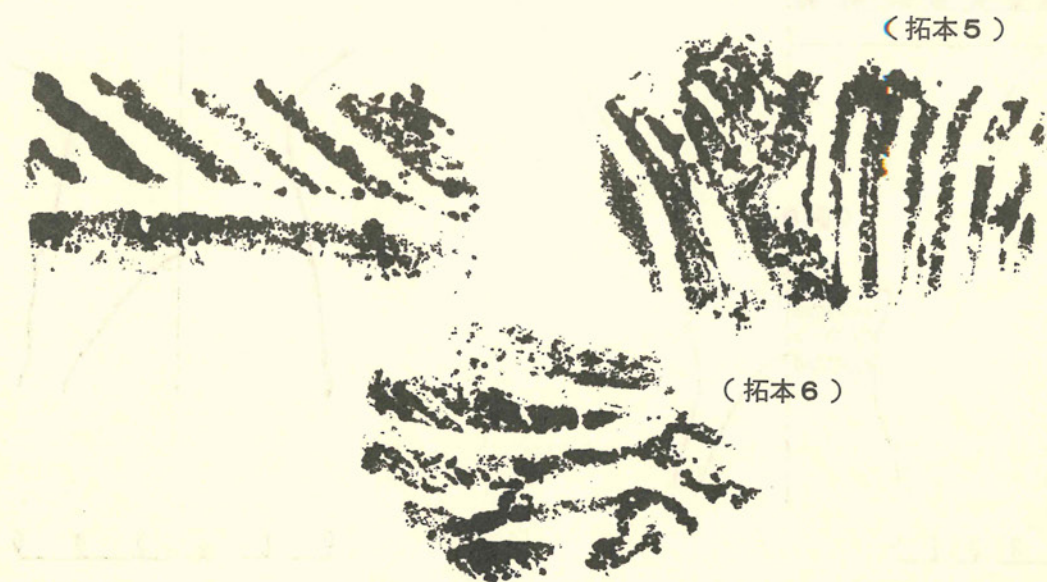


1.吉岡原遺跡 2.高田遺跡 3.吉岡下の段遺跡 4.西山遺跡(仮称) 5.原新田遺跡 6.大竹横穴墳群

吉岡原遺跡



吉岡山遺跡



れ、弥生後期末から古墳時代初頭までの集落跡と報告されている。

行人塚古墳は従来から円墳と考えられていたが、女高遺跡調査中前方部が確認され、全長42mの前方後円墳と判明した。明確な構築時期は不明であるが、立地条件から考察すれば、ひさご塚より新しく吉岡大塚より古い時期であろう。五世期初頭頃の古墳と考える。

(遺跡の概要)

高田遺跡は地域が非常に広範囲である。今回採取した大部分の土器は高田製茶工場裏の茶畑であった。採集土器は古式土師器が主流であったが、遺跡内他地域では弥生式土器と思われる破片が散布していた。

(遺物について)

高杯(図7) 無文であり杯の部分は破損している。脚部に透しがないことから古式土師器和泉期である。

壺(図8) 薄手であり、口縁部は「く」の字に外側に折り返しになっている。口縁部先端部分に薄く縦に沈文が入っている。時期は弥生後期末である。

脚付鉢(図9) 脚部との接合部に櫛状器具を強く押捺した羽状斜線列がある。弥生後期末か古式土師器五領期である。

(遺跡の性格)

弥生後期末から古式土師器和泉期までの集落跡と考えられる。特に和泉期の古式土師器が多量に出土していることから、下層は女高遺跡と同時期であり、上層は女高遺跡より新しい時期と考察することができる。

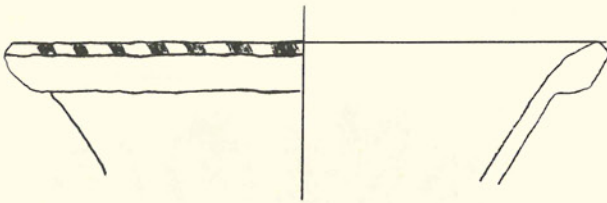
②吉岡下の段遺跡

(位置と環境)

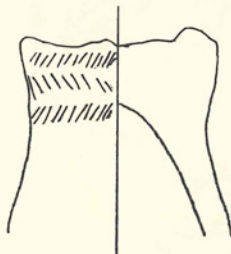
本遺跡は吉岡大塚古墳東、一段下がった平坦部がゆるやかな傾斜をもって春林院古墳西側までに広がった地域である。掛川市遺跡地図では縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器の散

高 田 遺 跡

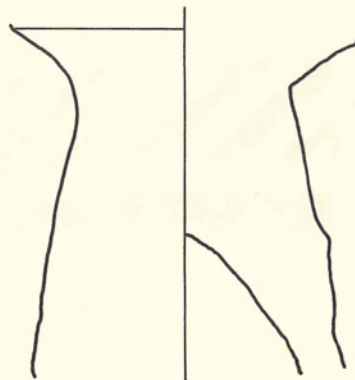
(図8)



(図9)



(図7)



0 1 2 3 4 5

0 1 2 3 4 5

布地と記載されている。

春林院古墳は昭和三十六年に発掘調査された。発掘には研究者、地元住民、地元中・高校生が参加し、全面発掘をした県下でも画期的調査方法であった。主体部は粘土郭であり、遺物は壺型埴輪等が出土し、五世紀初頭の円墳である。

(遺跡の概要)

今回、茶の改植があったのは春林院古墳裏側の地域であった。採取土器片は新しい時期の土師器が主流であり、中に少数の須恵器片、灰釉陶器片が混入していた。縄文式土器片は遺跡内西側大塚古墳寄りで少数採取し、古式土師器片は遺跡中央部地域で採取した。

(遺跡中央部)

壺(図10)口縁部であり無文。ヘラでの生成も非常に丁寧であり、焼きも固い。時期は古式土師器五領期又は和泉期と思われる。

(春林院古墳裏)

瓶(図11)底部である。高台はなく、底部の裏面に糸切りが明確に残存している。釉薬を使用した灰釉陶器である。時期は平安後期と考えている。

他に多量の新しい時期の土師器を採取したが、時期判別は不可能であった。

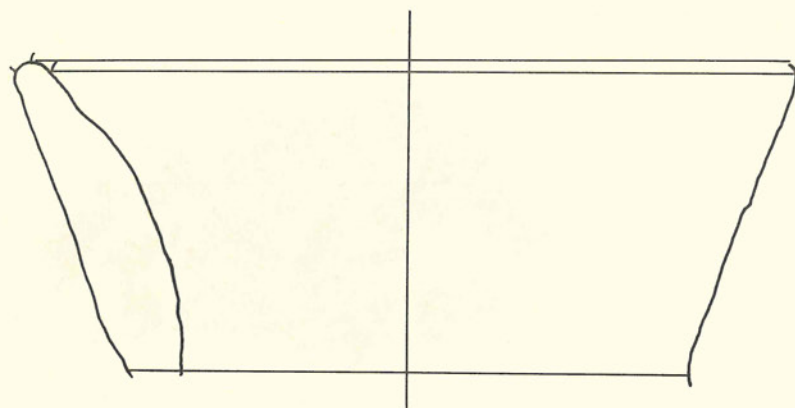
(遺跡の性格)

春林院裏地域は地山土に土師器片・須恵器片・灰釉陶器片の包含層が存在する。土師器片・須恵器片からは时期的判別が不可能であった。

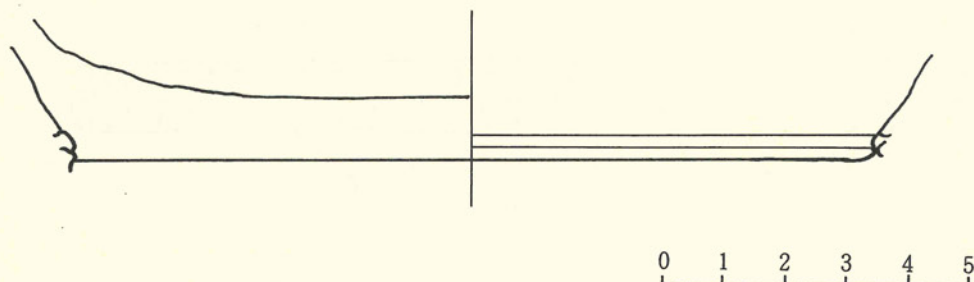
我が国での灰釉陶器発生は八世紀後半代愛知県猿投窯において開始されたと考えられている。初期には一部上層階級向けへの特産物であったが、十世紀後半から十一世紀にかけて、一般集落への浸透も進み、地方富豪層あたりまでゆき渡るようになった。本遺跡出土瓶は底部に凹部があり高台が消滅した時期で

吉岡下ノ段遺跡

(図10)



(図11)



ある。灰釉陶器編年表と比べ十二世紀前半、平安時代後期と考察してよいだろう。

本遺跡は吉岡大塚古墳寄りに縄文期の包含層・遺跡中央部に弥生後期から古式土師器五領期の包含層、そして遺跡最東側に平安後期の包含層と続くと考察するのが妥当である。

Ⅱ、西山（仮称）遺跡

（位置と環境）

原谷地域にも非常に多数の遺跡がある。近年、発掘調査が行なわれた宮坂横穴群・平塚古墳とともに横穴式石室が現存する原谷長福寺一号墳、その他にも縄文遺跡・弥生遺跡・古墳群が点在している。これ等の遺跡群は大部分が原野谷川東側の丘陵地域に存在している。原野谷川西側西山地区では弥生遺跡2・横穴群1・城跡1が発見されている。これ等の遺跡群、又和田岡原の遺跡群すべてが台地上に点在しており、平野部では今まで発見されていなかった。

今回紹介する西山（仮称）遺跡は平野部で発見された唯一の遺跡である。本遺跡は県道赤根・金谷線が袋井市宇刈に抜ける直前、平野部より一段上がった平坦部に位置しており、原野谷川自然堤防上に広がる遺跡である。

（遺跡の概要）

土器片は県道赤根・金谷線舗装工事中に採取した。遺構の存在する包含層は地山土であり、土師器片と弥生土器片が出土した。遺跡周囲は西側以外は田であり、遺跡地域より一段下がっている。遺構は西側丘陵方向へ広がっていると考えるのが妥当である。

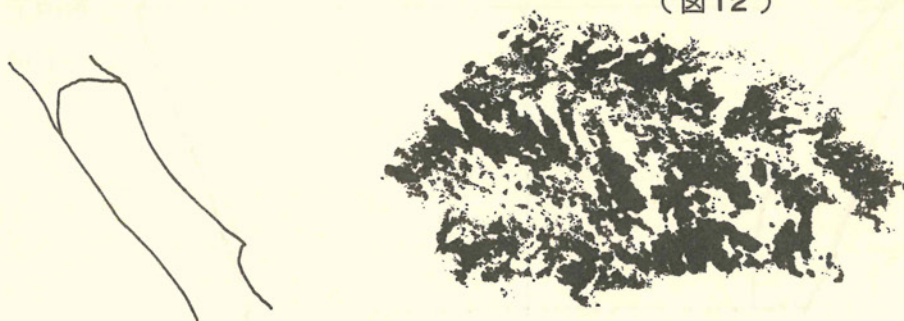
（遺物について）

壺（図12）頸部である。頸部から胴部へと移る所に二段の凸部を持ち、羽状縄文帯が反対方向へと走っている。時期は弥生後期末である。

他に胴部に刷毛目模様のある古式土師器片又は弥生後期末の

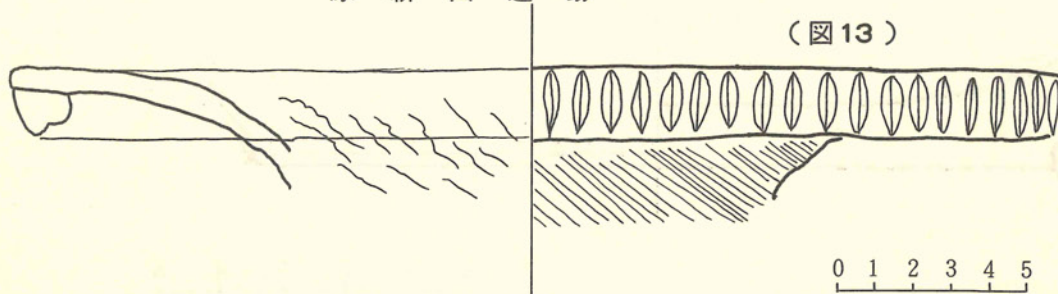
西山口遺跡（仮称）

（図12）



原新田遺跡

（図13）



土器片を数点採取した。

(遺跡の性格)

本遺跡は余り広範囲ではなく、位置は平野部より一段上がった為、流入した土器片とは考えられない。時期は弥生後期末から古式土師器であり、包含層は地山土であるため、他時期の遺構は存在していない。

Ⅲ、原新田遺跡

(位置と環境)

本遺跡は城北小学校西側丘陵上にあり、倉真川流域の遺跡群である。

倉真川流域は原野谷川流域とともに掛川市の二大遺跡保有地域である。縄文遺跡では倉真地区里在家遺跡、西郷地区平塚山遺跡、弥生遺跡では西郷地区小市遺跡、天王山遺跡、古墳では横穴式石室を持つ平塚古墳、美人ヶ谷古墳群、天王山古墳群が点在している。

他に西郷地区には下山古墳がある。本古墳は全長約百十二メートルの前方後円墳と報告されている。しかし、実際に古墳であるかどうかは論議的であった。近年、本古墳の前方部・後円部南側で茶の改植があった。その際墳丘上から須恵器片数点を採取したが、埴輪片又埴輪関連遺構は全く検出できなかった。下山古墳は「古墳ではない」と考察するのが妥当である。

本遺跡(原新田遺跡)平坦部に二ツ池古墳群がある。又、遺跡南側天王山には天王山遺跡、天王山古墳群がある。天王山遺跡は弥生後期の高地性集落跡、又、二ツ池古墳群は六世紀中葉の円墳と報告されている。

(遺跡の概要)

本遺跡地域内からは弥生後期末の土器片が多数採取された。今回紹介する土器は丘陵南裾農道造成中に表土より約五十センチメートル下、地山土より出土した。出土地は丘陵斜面である。(遺物について)

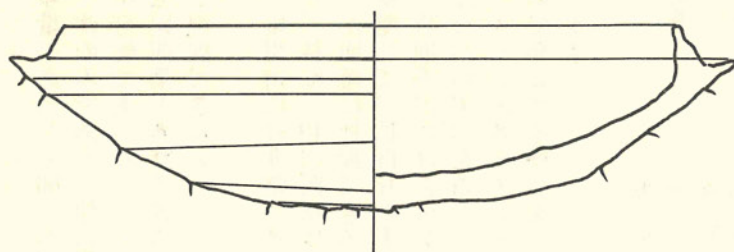
原新田遺跡

(図14)



大竹横穴墳

(図11)



0 1 2 3 4 5

壺(図13) 口縁部には折り返しがある。口縁部は折り返した裏側より帯状の粘土を張り合わせて生成し、縦にヘラで深い沈文を施してある。口縁部から頸部にかけては、斜めに刷毛目模様が入り、内側は薄く羽状縄文帯が施してある。口縁部は波状になり粗雑である。時期は弥生後期末である。

壺(図14) 胴部がふくらみを持ち、無文である。菊川式土器である。

(遺跡の性格)

遺跡地域内で採取した土器はすべて弥生後期末である。今回の土器片は地山土で出土しているため、他時期の包含層は存在しないと考えている。同じ丘陵上の天王山遺跡が弥生後期の集落跡と報告されているため、それに続く時期の遺構と考察できる。ただ、今回の出土地が丘陵斜面上であるため、集落跡と予想するより方型周溝墓と考察した方がより妥当であらう。

Ⅳ、大竹横穴墳

(位置と環境)

本古墳は水垂地区の一番奥まった北側の丘陵斜面に位置しており、茶畑の開墾のために消滅した。丘陵南端に大竹遺跡がある。大竹遺跡は密教法具、天目茶碗、明代の青磁、古銭が出土した十六世紀後半の遺跡である。遺物は水垂小関氏と城北小に保管されている。

水垂大多郎には弥生後期の大多郎遺跡、大多郎古墳群があったが、いずれも宅地造成で消滅した。

(遺跡の概要)

大竹横穴墳は二基存在していた様だが明確にはわからない。本古墳群は南側を向いて開口しており、旧粟本地区内では唯一の横穴群である。

(遺物について)

杯(図15) 杯の受けである。立ち上がりは低く、受け部より約七ミリメートル程度立ち上がっている。ヘラで丁寧に生成し

てある。時期は七世紀前葉であらう。

(遺跡の性格)

出土物は非常に多量であったと聞くが、時期判別のできる土器片は紹介した杯一体のみである。他に甕腹も数片残存していたが、時期判別は不可能であった。

杯より時期は七世紀前葉と考察できるが、追葬、又、二基の横穴墳の関連は全く把握できない。

(終りに)

今回、踏査をして掛川市には非常に多くの遺跡が埋没していることが理解できた。特に、和田岡原は大規模な発掘がなされれば掛川の古代社会が明確に把握できると思う。

採取した土器を整理して、私自身の実力不足が明確になった。特に土器の説明又、時期設定には苦労した。

今後、踏査を続けながら実力を蓄え、埋没している多くの遺跡群を明確にしていきたいと考えている。

最後にこの様な場で発表する機会を与えていただいた諸先生方に心より感謝致します。

(参考資料)

- | | |
|-------------------------------|-----------|
| 1. 掛川市遺跡地図 | 掛川市教育委員会 |
| 2. ふる里かけがわ第五集 | 掛川市教育委員会 |
| 3. 森町考古16 | 掛川市教育委員会 |
| 4. 大沢・川尻古窯跡調査報告書 | 湖西市教育委員会 |
| 5. 陶 邑 | 田辺昭三 平安高校 |
| 6. 縄文文化の研究Ⅱ | 雄 山 |
| 7. 陶磁大系5、三彩、緑釉、灰釉 | 榑崎彰一 平凡社 |
| 8. 行人塚遺跡 | 掛川市教育委員会 |
| 9. 吉岡大塚古墳 | 掛川市教育委員会 |
| 10. 中原遺跡 | 掛川市教育委員会 |
| 11. 水垂二ツ池古墳群 | 掛川市教育委員会 |
| 12. 考古学研究63「五世紀における古墳の規制」小野山節 | 考古学研究会 |
| 13. 考古学講座3先史文化 | 雄 山 |
| 14. 考古学講座4歴史文化 | 雄 山 |